ろくおん通信
発行日：1996年3月15日
No.80号
発行：盲人情報文化センター録音製作係

「音声訳」を考える（第33回）

処理を考える　（8回）
～ 漢字の処理　3 ～

前回の例文は、分かり難いと思われるところをわざとカタカナで表記しました。これは利用者が聞く状態に近い形にしてみたものです。実際、前回カタカナで表記したような音声訳をしてしまうケースが多く見られます。漢字を見てしまうので読む前から音声訳者にはわかってしまっているので、つい補足の必要性まで気が付かないことが多いからでしょう。しかし、実際にこうしてカタカナで表記してみるとわからなくていらいらするのではないでしょうか。音声で聞く利用者はこうしたケースが多々あるわけです。

また、補足するといっても、どこまでするのか、なんでもかんでもしてしまうと今度は煩雑すぎて何がポイントだったのかがわからなくなってしまいます。音声訳者は実際の文章に即して適宜判断していかなくてはならなりません。

以下は、処理案（処理をした部分は下線をしています。）を参考までに掲載してみますが、処理の方法はいろいろありますので、検討してみてください。もちろん読み方のテクニックも問題になりますがこれは別の機会での研修が必要でしょう。

＜訂正＞
前回の2ページ、11行の「ツシマ」[2]は「ツシマ」[1]のあやまりでした。

処理の例

森浩一著『古代史の窓』

ツ[1]シマとツ[2]シマ、はじめのツシマはツツウラウラノツにシマ、後のツシマはツイニナッテイルのツイにウマ、

戦後の考古学では、『古事記』や『日本書紀』の史実は、せいぜい五～六世紀ごろまで、それも部分的にしか遡らないとする風潮が強かった。僕のみるところ古代史の領域でも、戦後すぐは崇神天皇のころからあと、それから応神天皇のころからあととなり、さらに厳密になって雄略天皇のころからあとなど、十年ぐらいのスパンで変化している。

ところが埼玉県の稲荷山古墳の鉄剣に百十五字を刻んだ銘文があらわれ、その人名の一人獲加多支鹵（ワカタケル）大王が雄略天皇と推定されるようになってから、“いつからあと”のような概括的な議論はあまり聞かなくなった。とはいえ、やはり弥生時代のことなど記紀にはまったく反映していないと考えている人が多いだろう。

僕がいつも不思議に思うのは、倭人伝ではツシマのことをツイ[2]ウマと表現しており、ツイ[2]ウマの表記法はそのあとどの時代も使われ、今日でもツイ[2]ウマである。つまり少なくとも千七百年のあいだ同じ字のあて方がつづいているのである。もちろん音韻学は僕の専門外だから、どうしてこの二つの漢字でその地名をあらわしたのかはわからない。

倭人伝でツイ[2]ウマと書いているだけでなく、『日本書紀』での国生み神話の地名でもツイ[2]ウマを使っている。このことは、おそらく『日本書紀』の編述にたずさわった人たちが『三国志』をよく読んでいたと推定されるから、ツイ[2]ウマの表記法をあてたのであろう。例えば奈良時代の太宰府にも、『三国志』などの中国の主要な書物は備えつけてあった。

土地の役割でいえば、ツシマはツシ[1]マ、ツノシマである。これは『古事記』の国生み神話での表記法である。イキをイキ[3]音声訳者注[4]、ハジメノイキノイハ、ヒトツトイウイミノカンジ、アトノイハ、イセノイ、注終わり、サドをサド[5]、音声訳者注[6]、ハジメノサドノドハワタル、アトノドハオンドノド注終わり、などと漢字の音であらわしているのにたいして、ツシマは港（津）がいっぱいある島という

意味のツシマ（ここはそのまま）を使っている。実際、ツシマ（ここはそのまま）を訪れると港がたくさんあるばかりか、そこには弥生時代に繁栄していた様子を物語る遺跡がたいていある。佐賀県の呼子からフェリーが通っている印通寺の港の背後には、有名な原の辻遺跡がある。ツシマは考古学の遺跡からみると、弥生時代にいちばん賑っていたらしい。

太平洋側では、伊豆諸島にツシマがあった。この島は航海の要地ではあったが火山があるため神の猛威が作った島としておそれられ、いつしかコウヅシマ、カミサマノカミニ、ツシマ、とよぶようになった。それにしても、玄界のツシマがツシマ国（ここはそのまま）になったのに、伊豆半島は別にすると、神津島など伊豆諸島だけでは国にならなかった。ここにも航海の要地とはいえ、対外交渉での重要性の違いがあらわれている。

佐用姫岩と倭人伝

倭人伝では、ツシマから壱岐、壱岐から末盧へと舞台が展開する。帯方郡から倭に派遣された中国の役人の紀行文にもとづいて記述されたのであろう。マツロ、マツハスエ、ロハ、クロイノイミノロ、マツロは、『日本書紀』や風土記では、マツノキノマツニ、ウラ、ツツウラウラノウラと書いている。ただしマツウラと書いても、マツラと発音することは周知のとおりである。倭人伝でマツラ（マツロ）について、“四千余戸の家が山と海にそってある。草木がよく茂っていて前を行く人が見えない。魚やアワビ(省略する)を盛んに捕っていて、深い海にもぐって取っている”と描写している。

僕はずっと以前に壱岐の印通寺から呼子までフェリーに乗ったことがある。船が呼子の港に入ってくると、うしろに山のせまった海岸ぞいに人家が帯状に並んでいるのを見て、倭人伝の描写のとおりだと感心した。それに海にもぐってアワビのとれるのは、今日の唐津市のような砂丘のつづく海岸は適しない。この点も呼子とその周辺の地形はぴたりである。それもあって、マツロの中心地は別にして、魏の役人が最初に九州島で印象にのこったのは呼子のあたりだと考えたことがある。九三年、唐津市に二度滞在する機会があった。美しいマチだ。その美しさの一つは海岸に長くつづく虹の松原のある砂丘であろう。だが古代人もこの風景を見たのだろうか。

これは唐津にかぎったことではないが、日本海沿岸に砂丘のある土地は少なくないが、海側の砂丘(三つ並ぶことが多い)の形成は古代までさかのぼるところは少ない。唐津でも、虹の松原の砂丘には古代遺跡の存在は知られていない。つま

り古代にはもっと山側にいくつかの潟のある地形だったと推定されている。

十月二十日、夜明けの鏡山の頂上に立った。衛星放送の生中継のためである。風土記や万葉集によると、鏡山は褶振(ひれふり)の峯といった。それは大伴狭手彦(さでひこ)が朝鮮半島に行くとき、サヨヒメ(オトヒメ)がこの山から船を見送りヒレ(一種のスカーフ)を振ったという。

山頂から見下ろすと、松浦川のほとりに巨岩の露頭がある。驚いて土地の人に聞くと佐用姫岩といって、サヨヒメが山頂から飛びおり、船を追ったという伝説のある岩石だそうだ。伝説はともかく、古代の唐津の海に岩礁があったとすると、アワビを捕っていてもおかしくない。それが倭人伝の時代か、あるいはそれよりずっと前だったかは今後の研究にまたれる。

アワビを[10]一、ウオヘンニフクと書くこと

倭人伝では、マツロ(マツロ)国の風景として魚やアワビを海にもぐって捕っていると書いている。今日アワビといえば、ウオ[11]ヘンニツツムと書く。“ウオ[10]ヘンニフクノアワビの貝の片思い”などと書くと“間違っていますよ”といわれかねない。ところが倭人伝では、ウオ[10]ヘンニフクの字を使っている。

余談になるが、十数年前京都の古道具屋をのぞくとアワビの殻を二つだきあわせ、それに漆で底と口を作った酒器を見つけた。百年ぐらい前、どこかに粋人がいて片思いなら二つを一つにしてやろうとして作らせたのかと想像してみた。少し値は張ったが、標本に買っておいた。『日本書紀』の允恭天皇十四年の記事に阿波国の海女の話がある。鳴門海峡にある無人の沖の島には海人集団の墓と推定される古墳があって、アワビ起しに使ったと考えられる長い石棒が出土するので注目されている。おそらくそのような集団にまつわる話であろう。

話の筋は、明石の海底の大アワビの真珠を取って淡路の神を祭れというので、一人の海人が取ることには成功したけれども命を落したという。ところでここではアワビに[12]ウオヘンニフクの字を使っている。字典ではこの字は毒蛇のマムシだが、話の内容からアワビで間違いなかろう。

古代での文字の許容範囲というか、応用力はたいへんおおらかである。『肥前国風土記』には、長崎県の五島列島の産物がでている。ここでは、鯛や鯖のように一字でタイやサバをあらわしていて、アワビは[13]ムシヘンニツツムの字にしている。

アワビのことを倭人伝では[10]ウオヘンニフクにしている。これは今日では使わな

いし、『日本書紀』や風土記でもいくつかの例を見たようになじまない。ところが八世紀に平城京へ諸国から運ばれたアワビにつけた荷札木簡でみると、ウオヘンニフク[10]の字をよく使っている。アワビはどこの国からでも運ぶのではなく、千葉県の房総半島の安房国や島根県の隠岐諸島からの木簡が多いが、たいていはウオヘンニフク[10]である。魚によっては、イワシをイハイセノイ[1][4]、ワハワカヤマノワ、シハコレ、とかイセノイ[15]、ワハユダネル、シハコレとか漢字の音を使って土地によって別の表記法があるのに、アワビはウオヘンニフク[10]でほぼ統一されている。

以下は僕の推定にすぎない。倭人伝にウオヘンニフク[10]の字を使っているけれども、それが古代日本人の字書代わりの役割をしたのではなかろうか。平安時代の『延喜式』でも盛んにウオヘンニフク[10]の字が使われている。面白いことだ。

津島[1]　対馬[2]　壱岐[3]　伊岐[4]　佐渡[5]　佐度[6]　末盧[7]　松浦[8]　マツラ（ロ）[9]　鰒[10]
鮑[11]　蝮[12]　蛇[13]　伊和之[14]　伊委之[15]　神津島[16]

二通りの読みがあって意味が異なるもの・・・（４１）

直心	ｼﾞｷｼﾝ　(仏)純一無雑ですなおな心 ﾋﾀｺﾞｺﾛ　ひたむきな心	一物	ﾋﾄﾓﾉ　一つの器物に満ちた様 ｲﾁﾓﾂ　金銭や男根の隠語 ｲﾁﾌﾞﾂ　一つの物
一挙	ｲｯｷｮ　一つの動作 ﾋﾄｺﾌﾞｼ　一種の器量があること。	平心	ﾍｲｼﾝ　平穏な心　落ちついた心 ﾋﾗｼﾝ　石油ランプの芯の一つ
半日	ﾊﾝﾆﾁ　１日の活動時間の半分 ﾊﾝﾋﾞ　奇数の日	並べて	ﾅﾍﾞて　おしなべて　一面に ﾅﾗﾍﾞて

Q　ソニーのＴＣ－ＲＸ１０００Ｔは、録音するとレベルが下がるようですが？

A　最近、ＴＣ－ＲＸ１０００Ｔで録音するとレベルが下がるという苦情が出ています。当センターには同機種の録音機がありませんので確かめていませんが、京都ライトハウスや神戸市立点字図書館からは、実際に録音するとポーズ状態の時のレベルより下がるということが報告されています。現在、ソニーの方で調査中ですが結果が分かり次第この紙面でお知らせします。

リクエスト図書一覧

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。
グループの方で引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。

『わかりやすい障害者基本法』 『終末論と現代』　＜宗教＞ 『宣教　第19号』　＜宗教＞ 『警視庁草紙 上・下』＜小説＞ 『幻燈辻馬車 上・下』＜小説＞ 『新黄金法』＜小説＞ 『社会福祉用語辞典』＜社会福祉＞	『算命学中国占星術』　＜心理学＞ 『狂信者』　（上・下）＜小説＞ 『仏陀再誕』　＜宗教＞ 『ジュラシックパーク２』＜小説＞ 『可視光線総合療法』　＜医学＞ 『復刻ＳＦマガジン』　＜小説＞ 『ミステリーマガジン』　＜小説＞

引き受けて頂いたリクエスト原本	グループ
『死者の長い列』 ﾛｰﾚﾝｽ･ﾌﾞﾛｯｸ著	えくてもあ
『本田宗一郎の人の心を買う術』	〃
『読書の快楽』	〃
『獅子たちの曳光』 赤瀬川隼著	ICCB ﾘｸｴｽﾄｸﾞﾙｰﾌﾟ
『半村良コレクション』 ＜小説＞	ﾃｰﾌﾟﾗｲﾌﾞﾗﾘｰにしのみや
『ブラックホーン』 ＜小説＞	〃

お知らせ

『ろくおん通信』の更新について

グループの方で96年度の『ろくおん通信』の申し込みがまだのところには再度、申し込み用紙を同封しています。４月 15日までにお申し込みが無かった場合は、４月分からストップさせて頂きますので悪しからずご了承ください。

550　大阪市西区江戸堀1-13-2
盲人情報文化ｾﾝﾀｰ 録音製作係